松本　寧至著

物語・日記文学論考

桜楓社

松本寧至（まつもと　やすし）

昭和6年　群馬県生まれ。
昭和30年　大正大学大学院修了。
現　　在　二松学舎大学教授。
　　文学博士
主要著書　『とはずがたり訳注』上下（角川文庫）
　　『とはずがたりの研究』（桜楓社）
　　『竹むきが記』『錦木物語』（古典文庫）
　　『中世女流日記文学の研究』（明治書院）
　　他
現住所　〒370-01　群馬県佐波郡境町下武士
　　827-2

国語国文学研究叢書第35巻　**物語・日記文学論考**

昭和五九年一〇月一五日　初版印刷
昭和五九年一〇月二〇日　初版発行
定価三八〇〇円

著者©松本寧至
発行者　及川篤二
印刷所　㈱シナノ印刷

101 東京都千代田区猿楽町二―八―一三
㈱桜楓社
（電話）（〇三）二九五―八七七一
（振替）東京六―一八〇二〇

Printed in Japan　検印省略　3093-841071-0723

目次

I

君やこし我やゆきけむ……――『伊勢物語』斎宮秘話――……九
消えた白珠――『伊勢物語』第六段の形態について――……一三
高安の女――『伊勢物語』第二十三段――……二一
筑摩の祭り――『伊勢物語』第百二十段――……二八
いはねの松――まぼろしの『平仲絵巻』――……三三
「この世をば……」と「下品といふとも……」と
――道長と阿弥陀信仰――……三六
『浜松中納言物語』出典小考……三九
モティーフとしての長谷寺
――『松浦宮物語』における再生と再会――……五〇
錦木物語……六七

Ⅱ

土佐日記の諧謔
——一月十三日の条「といひて」は順接である——……八五
稲妻の光だに来ぬ——『蜻蛉日記』の歌——……九四
『蜻蛉日記』「おほばこの」の歌について……九八
紫式部日記の世界——創造と再生——……一〇七
『更級日記』の夢と信仰……一二八
中世女流日記文学……一三九
中世の日記・紀行……一四六
一　京・鎌倉の往還……一四六
二　『とはずがたり』とその周辺……一五三
建春門院中納言——王朝憧憬に生きる——……一五九
後深草院弁内侍——機智とユーモア——……一六四
『うたたね』の恋——阿仏尼の青春——……一六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『とはずがたり』の美と情念……一七四
夢の中の扇……一八四
『とはずがたり』の旅……一八八
『とはずがたり』と絵巻物……一九九
『一遍聖絵』と『とはずがたり』……二〇三
『とはずがたり』の歌と人麿信仰……二〇六

Ⅲ

『金槐集』の謎……二一三
芥川龍之介『道祖問答』再評価……二二七
逢坂の関と鏡山——地名の精神史——……二三九
あとがき……二三三

物語・日記文学論考

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

君やこし我やゆきけむ……

――『伊勢物語』斎宮秘話――

ここでとりあげるのは第六十九段、在原業平と伊勢斎宮恬子内親王との禁断の恋をかいた、もっともみやびやかな、有名な段である。『伊勢物語』という題名もこの段に因む。

昔、男ありけり。――その男、業平は朝廷の命で伊勢国に狩の使におもむいた。伊勢斎宮はこの使を、特にねんごろにもてなした。色好みのこの男は早くも二日目の夜、ぜひお逢いしたいと申し出た。斎宮は人の寝静まった頃、朧ろな月の光をたよりに、小さい女童を先きに立てて訪れて、男の寝所のところにすうっと立った。二人は子一つより丑三つ頃まで一緒にすごしたが、まだ「何ごとも語らはぬに」宮は帰って行った。さて夜が明けて、歌をよこした。

君や来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか

男はひどく泣いて、つぎの歌を返した。

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ

翌日は、今宵こそと、そればかり考えていたが、有難迷惑にも歓迎会が一晩中つづき、とうとうその機会をつくれないまま、また明る日は尾張国に出発せねばならなかった——。

男にも禁断の恋を犯すことにわずかのためらいはあったのだろう。午後十一時すぎから午前二時まで、その気なら充分ものになる時間を一緒にすごしながら、「まだ何ごとも語らはぬに」、肉体関係にまで及ばないうちに、お帰ししてしまった。そのあとで斎宮からこの歌である。残念がるのも無理はない。今宵こそ、かならず現実にして差上げますからね。だが、いちど逃したチャンスはもう二度とめぐっては来なかった。さてこの物語がロマンとなるのは、禁断にギリギリまでせまりながら、ついに最後の一線を越えることなく別れたという嫋々たる余韻からである。

ところが周知のように『古今集』恋三には、

業平朝臣の伊勢国にまかりたりける時、斎宮なりける人に、いとみそかに逢ひて、またの朝に、人やるすべもなくて、思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける　　よみ人しらず

君や来しわれや行きけむおもほえず夢かうつつか寝てか覚めてか

返し　　業平朝臣

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは世人さだめよ

と、ずばり関係があったとしている。しかも斎宮はこの密会でみごもって、生んだ子が、高階家の養子となった高階師尚であると、『尊卑分脈』『古今和歌集目録』、藤原行成の『権記』、大江

匡房の『江家次第』、源顕兼の『古事談』などにある。未婚の斎宮に通じるばかりか子までなしたという不祥事から、高階家の血を引くものは憚って伊勢に参拝しなかったとか、高階家が外戚だったために一条天皇中宮定子、例の清少納言の仕えた中宮の悲劇はあったとかいわれる。これらはいわば、勝者側からの説話だからにわかに信じられないかも知れないが、『古今集』という第一の勅撰集に堂々と記されているのを一概に否定も出来ない。角田文衛氏は、綿密な考証を加えて、業平と恬子内親王との一期一会の密会は、貞観七年十月中旬、西紀八六五年十一月十一日に当るとして、われわれを、あっといわせる（『紫式部とその時代』角川書店刊）。

ところで『伊勢物語』の業平の歌は「こよひさだめよ」となっているのに、『古今集』では「よひさだめよ」となっている。あるいはどちらかが誤写ではあるまいかと思われるほどの微妙な違いは、しかしまことに意味深長である。「世人さだめよ」とあれば、この禁断の恋、本当に関係があったのかなかったのか、とても自分ではわからない。しいて定めようというなら、他の人に決めてもらうほかはないとなる。まあよくもいったもので、これでは後人が説話を作りあげたくなるのも当然というものだ。『古今集』仮名序が「業平は、その心あまりて、ことば足らず」と評した通りで、いかにも業平らしい。それを『伊勢物語』はわずか、「こよひ」と改めることで、スキャンダルをロマンにかえたのである。

伊勢斎宮は巫女（シャーマン）である。シャーマニズムの研究は今かなり盛んだが、円地文子氏にも『なまみこ物語』があって、氏の代表作の一つである。その中でやはりこの関係を認めているが、さら

に次のようにいっている。

巫女に神が憑りうつるという状態も、精神と肉体の極度の緊張、恍惚、飽和という過程を辿るので、その間には性欲の本能も自然に満たされるわけであろう。つまり巫女は神憑りの状態に於いても、一種の性行為を行っているので、彼女達の女性は神によって閉じこめられるどころか、神によって解放されたとも言えるのである。

まさにその通りであろう。伊勢斎宮はいうまでもなく、未婚の皇女が天照大御神に仕えるのだが、天照が女神なのに皇女とはというわけだが、天照はもと蛇神であって（『通海参詣記』）、蛇神は両性具有とみなされる。また、さきの子の刻から丑の刻というのは聖なる夜の時間で、妖怪変化の跳梁する時でもあり、神が巫女に体をかりて現われる時でもある。「小さき童を先に立てて人たてり」というとき、もう宮は神憑っていた。

私は斎宮の「君や来し我やゆきけむ」こそ神と一体化した恍惚境の歌だと思う。元来神憑りの歌としてあったのかも知れないが、この歌自体がすでにこの段の謎に解答を与えているように思われる。

（「短歌」昭和五七年三月号）

消えた白珠

――『伊勢物語』第六段の形態について――

㈠むかし、をとこありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率ていきければ、草の上におきたりける露を、「かれは何ぞ」となんをとこに問ひける。ゆくさき多く夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいとみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、をとこ、弓籙を負ひて戸口に居り。はや夜も明けなんと思ひつゝゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎにえ聞かざりけり。やう〳〵夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

㈡これは、二条の后のいとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎国

経の大納言、まだ下らふにて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるをきゝつけて、とゞめてとりかへし給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、后のたゞにおはしける時とや。

（『日本古典文学大系』）

この段はいわゆる「芥川」の段で、珠玉と称すべき一篇である。草の上に置かれた露をふとみつけた女が、「あれはなあに」と男に聞く所は最も可憐である。しかし、これがよいとされるのは、今仮りに㈠とした部分についてで、㈡にあたる部分は「此下の詞は物語の作者のわれと又釈したる事成べし」（愚見抄上）とあるように例の補足的な説明である。確かに㈠㈡の間には明瞭な断層があり、これが一時に書かれたものとは思えないくらい調子が変っている。『伊勢物語』は一応業平を主人公としているという常識はある。それに従えば、この話は業平と二条后との恋愛沙汰だと読者は説明されずとも分る。だから㈡は蛇足だというわけだが、実際はどうであろうか。そういう常識をしばらく措いて読めば、この話は必ずしも業平と二条后との恋ということにはならない筈だ。掠奪結婚の話は古いところでは、神話や『出雲風土記』などにもそれらしいものがあり、『大和物語』（百五十五段）、『源氏物語』などにもある。『更級日記』の「竹芝伝説」もそうだ。いわゆる「嫁盗み」の風習は近代まで各地に行われていたものである。この形に凡そ三種類あって、Ⅰは娘の親も、娘自身も不賛成であり、盗まれることを予知しない場合、Ⅱは親は反対だが娘自身は気がすすみ、盗まれることを予知している場合、Ⅲは娘も乗気で、親も承知しているが、他家への義理とか、費用の点などから、表面上異議を唱えてこの形式をとるという場合など

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com